



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期宇野浩二における〈方言〉使用をめぐって：〈方言〉語りと「行為遂行性」（前）
Author(s)	宮崎, 靖士
Citation	国語国文研究, 125, 18-31
Issue Date	2003-10-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93671
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_125-18-31.pdf



初期宇野浩二における「方言」使用をめぐって

——「方言」語りと「行為遂行性」——（前）

宮 崎 靖 士

本論では、一作の主たる物語内容の提示を明らかに担う話者の語りⅡ「地の文」に「方言」を採用するという、近代小説の中でも極めて稀な試みをなした、宇野浩二『長い恋仲』（大正8・10『雄辨』）『因縁事』（大正9・5『中央公論』）『美女』（大正9・6『改造』）の三作を中心な検討対象とする。その上で、そのような例外的な「方言」使用作品の具体相と意義を、①形態面の分析、②形態面の特色と呼応する内容面における傾向の抽出、③「発話行為」の顕在化という三点から論じ、更には近代小説における語りの「中立化」をめぐる初期宇野浩二の問題機制までを明らかにすることが本論の目的である。なお、以上の三作品においては、「大阪弁」―「方言」を活用した、常体と呼ぶことがふさわしくないような地の語りの文体と、特に前二作の場合は明確になることだが、作品内への聞き手の顕在化とが共存させられており、いわば、語りの「場」の仮構と呼ぶべき状況が設定されている。この傾向は、後の宇野作品においてはあまり認められなくなるものでもあり、大正八から九年にかけての宇

野浩二における、小説表現の模索の痕跡として理解すべき問題と思われる。そこで、右のような傾向において共通しながらも、「方言」による地の語りではない『蔵の中』（大正8・4『文章世界』）も参考的な検討対象とし、並行的に検討することから、文壇登場期における宇野浩二の文学的プロジェクトの一端の究明という広がりのもとに、本論の検討を進めることにする。

そのような本論の検討は、右に述べたような近代小説における「方言」使用の大きな画期を明らかにしようとする試みである。と同時に、一方では宇野浩二論の新たな展開を用意し、他方では「方言」による語りをも含み、むしろそれが主導的だったとすら考えられる、初期宇野浩二の「口語体」小説に対する文学史的・表現史的な評価を新たな角度から提示する営みとなるであろう。

I 形態的な問題の検討

本節では、まず第一に、特に文末処理に注目した、件の三作品の文体分析からはじめたい。具体的には、各作品毎の「地の文」と会話文における文末処理の傾向を検討してゆく。なお、本論という会話文とは、鉤括弧処理をなされた部分のことであり、「地の文」とは、それ以外の文章である。また、右の検討を、特に文末部の比較に集約させて行う理由は、テンス、アスペクト、ムード及び聞き手への顧慮等の話者のスタンスを表示する「辞」的な語彙が、いわゆる「日本語文」においてはそこに集中しており、その要素を比較することにおいて、文体的な傾向を概ね明らかに出来るからである。

そこで、件の三作品における文末処理傾向の分析結果を、各作品毎の語りの枠組みに関する簡単な言及とともに紹介したい。なお、データの採取においては、初出形の本文により、句点の直前の語句を対象とし、特に会話文では閉じ括弧の直前の語句をも取り上げた。まず『長い恋仲』についてだが、この作品の物語世界内の語り手は「土屋精一郎」という名をもち、そのことは時に挿入される丸括弧内の言により示される。一方物語世界内の聞き手は、土屋を丸括弧内の言によって「話手」と指し示す「筆者」であり、その「筆者」が、土屋の話を整序している旨に言及する箇所も認められる。即ちこの人物は、自らが物語世界内で聞いた話を整序して採録する物語世界外の語り手でもあると考えられる。

つまり本論が問題とするのは、物語世界内の語り手による物語言

説であり、そこにおける文末表現に注目するのである。また、そのような語りは、物語世界内の聞き手へ向けた一種の会話でもあるのだが、それは鉤括弧処理なしで延々と記述されるものであり、かつその語りの中に鉤括弧つきの会話が登場し、更には物語世界内の聞き手に向けられた語りの多くが（次に明らかにするように）「た」を伴う（過去語り）なのである。そのような（過去語り）は、〈現在〉における作中人物どうしにおける対話との決定的な相違を示すと、まずは考えられる。更に本論が検討する各作品では、そのような物語世界内の語りが、量面的にも明白に一作の主たる物語内容の提示を担っており、以上のような点をふまえて、本論は、以下の各作品についても同様に、物語世界内の語りを鉤括弧付きで「地の文」として評定・表記するのである。

このような『長い恋仲』の文末処理の傾向をまとめると以下のようになる。

a 「地の文」の文末処理に関して、43例中、「た」が14例（約29％）、「や」が16例（約37％）、「な、なあ」が44例（約11％）、「か、かい」が20例（約5％）、「なんだ」が20例（約5％）、「ね」が10例（約2％）、「へん」が7例（約2％）。その他、動詞止めが23例（約6％）、形容詞止めが13例（約3％）。なお、「た」止めの文末のうち、「くやつた」が27例、「くよつた」が7例。文末において「た」に「辞」的語彙が後続する例が63例。

b 会話文の文末処理に関して、149例中、「な、なあ」が23例（約19％）、「わ」が16例（約13％）、「か、かい」が12例（約10％）、「やろ」が8例（約7％）、「へん」が7例（約6％）、「ね」が6例（約

5%）・「や」が4例（約3%）。

次に『因縁事』についてだが、物語世界内の語り手は「お鳥」という名の芸妓であり、そのことは、丸括弧内の言や物語世界に登場す彼女の父や夫たるべき人からの名の呼びかけによつて知られる。

また、物語世界内の聞き手は、結尾において、「お鳥」に「唄でもうたひまよか？」と呼びかけられる、〈現在〉の年老いた「お鳥」の客である。この人物は同時に、一作を丸括弧内から「哀れな老女」の物語と名付けるような、「長い恋仲」の場合と同様な、物語世界外の語り手＝採録者でもあると考えられる。

この作品の文末処理の傾向については、以下の通りである。

a 「地の文」の文末処理に関して、137例中、「た」が53例（約39%）・「だす」が23例（約17%）・「ね」が10例（約7%）・「や」が10例（約7%）・「か、かい」が7例（約5%）・「な、なあ」が7例（約5%）、そのうち禁止の意が1例。なお、「た」止めの文末のうち、「くでした」が14例、「くました」が39例。文末において「た」に「辞」的な語彙が後続する例が25例。

b 会話文の文末処理に関して、100例中、名詞止めが41例（約41%）・「や」が20例（約20%）・「か、かい」が18例（約18%）・「ね」が8例（約8%）・「な、なあ」が7例（約7%）、そのうち禁止の意の用例が1例。その他、動詞止めが8例（約8%）。

そして『美女』だが、語り手は、かつて「大丸」に「黒豆奉公」していたと冒頭で自己紹介する五十歳前後の男性である。なお、『美女』では、前二作の如く、物語世界内の聞き手からの言辞によつて物語世界内の語り手の名を示したり、物語世界外の語りの存在を明

示するような手法は認められない。また、聞き手については、語り手による呼びかけの対象ではあるが、『長い恋仲』『因縁事』のように物語世界内には顕在化されておらず、両者の関係も不明確である。なお、この作品には、鉤括弧付き会話文が一箇所しか登場しないため、「地の文」の分析のみを行う。

文末処理の傾向については以下の通りである。この作品では、読点によつて文と文を連続させるような手法が顕著にとられており、その結果、句点による文の区切れは非常に少なくなっているが、そのような少ない文末処理例からも文体の傾向は窺われると考える。

48例中、「な、なあ」が12例（約25%）、そのうち、禁止の意の用例が1例・「ね」が10例（約21%）・「た」が8例（約17%）・「だす」が5例（約10%）・「へん」が2例（約4%）。なお、「た」止めの文末のうち、「くでした」が2例、「くました」が5例。文末において「た」に「辞」的な語彙が後続する例は15例。加えて、前二作と比較した場合に明らかである、話者の立場性を特に強く表示する「な、なあ」や「ね」の比重の際立った高さについては、物語世界内の聞き手が後景化することとも関連させて後に注目する。

以上の検討を総合しつつ、本論の以降の展開に関わる要素として次の二点を明らかにしておきたい。まず第一に「地の文」の文末処理に関しては、三作とも、「た」止めの比重の高さは共通しており、その上で、指定・断定の助動詞に関して、『長い恋仲』では「や」が、『因縁事』『美女』では「だす」が、それぞれ採用されていることがわかる。〈方言〉や、あるいはそれに限らぬ話しことは小説の地の語りとして採用しようとする際に、最も基本的な課題となるのは、

「過去・完了」及び「指定・断定」の機能を担う言辞の選択だと考えられるが、その機能を担う言辞が、右のように選ばれたことがわかる。

続けて第二には、特に作品の内容面に関わる問題として、「地の文」と会話文との文体的落差の位相が注目される。会話が多くとり入れられる『長い恋仲』及び『因縁事』に共通するものだが、「地の文」と会話文との文末処理傾向を比較すると、両者は単純には一致しない。会話文には、物語世界内の「現在」時における作中人物どうしの対話であるため「た」は頻出しなしい、また指定・断定の文末表現についても、会話文へは「地の文」ほどの比重では登場しない。

だが、物語世界の時間・空間の設定やそれらの転換を含む物語世界の進行を司るという点において、指定・断定や過去・完了の表示を最も中心的に担うと考えられる地の語りの機能を考慮にいれた時、次の諸点が改めて注目される。①「地の文」の文末に、「ね」「か」「かい」「な、なあ」等の話者の立場性を強く喚起する語彙が確認できる点。②「地の文」の文末における「た」の用法のうち、動詞・形容詞等の「詞」的な語彙から直接接続するのではなく、「〜やつた」や「〜だした」のように、話者の属性や言表内容に対するスタンス、及び聞き手への待遇性その他を示す「辞」的な語彙を伴う用例が一定の比率で認められる点。③「地の文」の文末の「た」に「辞」的な語彙が後続する、「〜来たんや」「長い恋仲」「〜話がおましたんだす」「(因縁事)」「〜大仲よしだしたんだす」「(美女)のような例も数多く認められる点である。そして、そのように「地の文」に認められる「辞」的な文末語彙は、それぞれの作品の会話文と共有さ

れているものである。

するとまず第一に、これらの作品の「地の文」が、会話文の文体からは明瞭に区分されるように「辞」的な語彙を極力排し、その立場性を消去しようとする「中立的」な語りを指向するものではないことがわかる。そして更に、「地の文」の文末に「た」が認められても、その前後では、会話文との間に「辞」を多く共有していることにも鑑みると、「地の文」と会話の間には、指定・断定や過去・完了の指標の有無という点以外に、大きな文体差はむしろ認め難いという事が明らかになるであろう。

換言するならば、これらの宇野作品においては、作中人物どうしの会話と、その会話を引用・再現する水準に位置する(物語世界内の聞き手へ向けた)物語世界内の語りとが、語りの水準差は伴いつつも、それらの間の文体差を接近させつつ共存しているのであり、そのような意味において、件の諸作は「二重の会話」として構成されている作品だともいえるのである。このような見解をふまえた上で、次節では、如上の形態面での特色と呼応する物語内容の傾向を明らかにしていくことにしたい。

II 内容的な問題の検討

果たして、そのような「地の文」と会話文との「文体的接近」は、話者が、その語り(Ⅱ「現在」の言葉)に「辞」的な語彙をつきまとわせ、自らが引用・再現する会話文(Ⅱ「過去」の作中人物の言葉)の文体へとすり寄るような事態として理解できるだろう。この

ことを小説の内容に関わっていく問題として捉えようと、話者における「過去」(Ⅱ「等質物語世界」の物語内容)への積極的な歩み寄りによる、「現在」と「過去」との「差異」の非顕在化への指向が読み取れるのではなからうか。そして実際、そのような指向が、件の宇野作品においては、その各々の作品における内容面での特質と密接に関わるものとして、語る「私」と語られる「私」、あるいは主たる登場人物との関係として顕著に見出されるのである。

そこで、「地の文」と会話の関係と呼応する物語内容を探るという目的から、会話文が「カ所し」かない「美女」については、本節では検討を見送り、『長い恋仲』『因縁事』、更にはそれらと同時期に発表された、『方言』が明瞭に用いられてはいなく「標準語」に近い「口語体」の代表作といえる『蔵の中』を、ここではとりあげたい。

三作に共通するのは、「私」の「過去」にまつわる回想語り(以下、本論では、それを「私語り」と表す)という性格であるが、まずは一般的な問題として、「私語り」が、話者自身の「過去」を、まさに自らが「現在」において語り出すことで再編成し、自他に向けて提出するというプロセスを内含する行為である点を確認しておきたい。だとすると、「私語り」の内容は、そのような機構のもとに現出された自己像として認識可能になり、そこから、そのような自己像を、語るべき自らの「過去」として選択・編成・配列した話者の価値基準や認識のスタンスを読み取れるようになるであろう。更に、次に検討する宇野浩二の諸作においては、そのような機構それ自体が、一貫した自己像の構築に対して矛盾をきたすような要素との共存によって作品上に露呈されているという問題までが見出せるので

ある。以下、そのような問題を、件の三作の内容面に共通する傾向として明らかにしていく。ただしここでは、次節で検討するような「脱線」や錯時的な要素については差し当たり言及せず、物語内容を中心とした検討を行うこととする。

まず『長い恋仲』についてだが、この作品の聞き手は、物語世界内語り手「土屋精一郎」の美術学校以来の友人だと考えられる。そして、そのような聞き手をもつ『長い恋仲』の語りにおいて、語り手は、友人たちによってなされる自らの人物評に対して非常に意識的である。そのことは、「友だちの中でも、土屋ちいふと、年が年中女子のことはかりで苦労してる者みたいに、噂されてんのを僕は知ってる」のような書き出しや、その後も「君もよう言うたことやが、僕は今の世の青年たちの多くと違って、自分が一旦惚れたとなると、決して相手の思はくなどいふものをかまはん方で、」とか、「このあんまり世間的や言うて時々友だちに非難される僕がやデ、そんな非常識な厚かましいことをしたことがあつたんやデ」のように、友人たちの評価を意識した地の語りが多く存在することから確認できる。そして、右の最初の引用部にひきつづいて、「けれど、さて、よう／＼考へて見ると、僕が生れてからこの年になる迄に、交渉した女子の数ちゆふもんはそない幾人もないのやデ。」「つまり小説家みたいな物の言ひやうをすると、初恋の女だけが、僕の一世一代のたつた一人の恋人で、後の人は皆お添物の、間に合せのんやと言へるかも知れん」という件りが後続する。それに加えて『長い恋仲』の主要な物語内容が、語り手における「酒井千代子」との関係係を中

心とする女たちとの交渉をめぐる事柄であることに鑑みると、この作品の語りの基本的な性格は、自らの女遍歴に関する友人からの人物評を事象面では肯いつつも、その内実を初恋の相手への執着ゆえのものとして更新していこうとするものだと考えられる。

果たして、そのような更新を導こうとする作中の記述としては、右の引用箇所他にも「千代子」を「長年切れかゝつては切れんと、丁度昔の小説家や詩人の題材には持つて来い言ふ程の、珍しい初恋の女子」と語る件りや、東京での在学中に同棲した「ヒステリイの女優」までが「千代子」に面影が似ていたと述べる箇所がある。また自らの女遍歴に関して「僕は随分友だちの噂通り所謂狡い男で、〈中略〉ところが、〈中略〉略々二年に一度おき位に屹度、その持前の狡さも、銭金の始末も、何も彼もまるで忘れてしまつて、夢中になる女子を発見するのや。〈中略〉結局それ等の女子は僕にはみんな千代子の思出見たいなもんかも知れへん」のように意味づける一節の他にも、そのような記述は随所に認められる。

そのような基調から転じて、作品後半部では、大阪での再会後の「千代子」に対する心情の変化が記されつつ、これまでに自らが関係した女たちと異なり「千代子」には似ていない「讃岐の國の素封家」の「純潔」な娘と結婚し、その後東京へ転居する旨が語られる。そのことは、「私」における「千代子」への執着からの脱却とも理解できる。しかし、作品結尾においては、「さてやつぱり折にふれて忘れられずに思ひ出すのは千代子のことや。〈中略〉さあ、(と土屋精一郎は最後に言った)僕たちの仲はこれ切りでお終ひやらうか、それは分らん、兎に角二人ともまだ生きてゐるのやさかい、又何時ひ

よつこりどんなことが持ち上るか?―何にして随分長い恋仲やう?……」と述べ、「千代子」との関係を再び繰り返すかもしれない可能性をほのめかしている。つまり、初恋の相手への執着が途絶えてはおらず、これから先もつづいていくであろうことを改めて示唆するのである。この結尾の件は、そこまでの「私語り」の物語内容に、改めて枠付けを施そうとするものだと考えられ、それ故にこそ、本論では、語り手における「千代子」への執着を、その「私語り」の主眼をなすものとしてあげたのである。

ところが、『長い恋仲』の語りには、そのような基調に背反するような、まさに右のような作品結尾の枠付けがむしろその強引さを自己露呈せしめようことになるような筆致が共存している。即ち、語り手における女遍歴が初恋の相手への執着などではなく、単なる好色の結果に過ぎないかのような印象を喚起してしまうような筆致までもが、作中に散りばめられているのである。

そのような語りは、右にも引用した「千代子」を「一世一代」の恋人と述べた部分の直後に、町中で年頃の女を見ると「振り向かんとこと思ても」、振り向かずにはいられないと語つてしまう箇所をはじめとして、作品後半で「千代子」と再会した後に、彼女との心的距離を語る一方で、彼女の家を訪ねる毎に、その下女である「お金」へ興味を持ちだしたことを述べる件りなどに認められる。その中でも特に注目されるのが、自身の女への指向を「虫」と表現する件りの存在である。それはまず、「京都の三流芸妓」に惚れて大阪から毎日のように通つた頃を回顧する箇所において、金がなくて出かけられない時には手紙や贈り物をして「虫を鎮め鎮めしたもんや」

のように用いられる。続けて、作品終盤「お金」が確たる理由もなく恵まれた奉公先を去ろうとすることに関して、語り手が述べる感慨のうちに次のように記されている。

君、お金の言ふことは分かるな、へ中略へ彼女の帰るといふことは、彼女には唯さうする方がえゝ思つたちふ以上に、何の理由もないんだと僕も思ふ。だけど、君、彼女の意志のあるところは分るな、分るな……考へて見ると、お金は嫌になつたら逃げて帰去ぬるけれど、僕や彼女は、もうとうから嫌には十分なつてんねやが、自分等の腹の中にある虫やもん自分等が死なん限り、逃げて去ぬいふ譯には行かんのや。

ここには、「嫌になつたら逃げて」しめる「お金」という女性と対比して、自身と「千代子」は「腹の中にある虫」―改心不可能な本性―をもつが故にその本性から脱却することができない旨が語られている。上記の用例やそれまでの物語内容に鑑みる限り、ここでいう語り手の「腹の中の虫」とは自身の好色性を指すものだと考えられるだろう。ただし、「千代子」にとつての「虫」も（語り手が語る如く、それが存在するとして）語り手と同様に好色の本性であるとは必ずしも断定できず、特にそれ以前に「千代子」における、食物や着物の嗜好の豪奢さを例とした「デカダン」な暮らしぶりが強調して語られていることに鑑みると、むしろ彼女にとつての「虫」は好色に限定されない広義のデカダンを指すと考えられるものである。だとするとそこからは、「千代子」の「デカダン」ぶりを好色にのみ限定し、それを彼女の本性として語ることにより、自らの本性の構築に利用しようとする語り手の指向がむしろ垣間見られてく

るだろう。

何れにせよ、語り手が自身の女への指向を「虫」のように評してしまうことは、初恋の相手への執着として自らの女遍歴を意味づけようとする指向を決定的に相対化してしまう行為である。そして、そのような事態が紙上に提示された後に、前に引用した、「千代子」との関係の継続性の示唆と、それを含む二人の関係を「長い恋仲」として枠付けようとする付言が隣接されることから、自らの女遍歴を、初恋の相手への執着として友人たちに向けて再編成しようとする語り手の手つきと、その強引さとが露呈されるのである。また、そのような語り手の「行為遂行性」の露呈を導く痕跡を担保するようには、「土屋精一郎」の語りの聞き手である友人が、その語りを採録したものであるとして、この作品は理解できるであろう。なお、ここで「行為遂行性」という用語を採用するのは、例えば「私語り」において構築される語り手の「過去」についての像とは齟齬や矛盾をきたすような要素があるにもかかわらず、そのような「ズレ」を語りにおいて塗り込めていこうとする「現在」の話者の傾向が看取されるからである。^(注5)

そこで更に、この作品の語り手が、語り手の結婚後になされた「私語り」である点を考慮に入れると、その目的は、次のようなものとして理解できるだろう。すなわち、初恋の相手への執着としてかつての女遍歴を意味づけることにより、一方では今後の画壇進出にもふさわしい（作品終盤には、前年の展覧会に入選し「今度、捲土重来」して妻を連れ上京した、とする地の語りが認められる）「純潔」な少女を娶ったことに代表される語り手の顕著な変質と、他方では

それまでの女遍歴を好色的な本性の発揮と理解する評との双方を同時に打ち消そうとするものである。そのような理解に立つとき、『長い恋仲』の後半における再会後の「千代子」への心的距離の設定や、彼女の過去の男性関係をいまさら敢えて「意地悪う」語り出す件りは、そのような語りの目的に奉仕する―現在及び未来にかけての実際の妻としては、「千代子」を隠微に排除していく―ものとして明確に位置付けられるのである。

そして、そのような語り手の変化を覆い隠す装置の一つとして、前節で検討した〈現在〉の話者の言葉である「地の文」と、〈過去〉の作中人物の言葉である会話文との文体的接近は（以下に検討する諸作品にも共通する事情として）有効に機能するといえるだろう。このことは、言文一致体の地の文に対して会話文に〈方言〉が用いられる一人称回想体の諸作においては、地の文と会話文との文体的落差そのものが、〈過去〉の語られる「私」から〈現在〉の語る「私」への変質―それも多くの場合は成長―を指し示すこととの対照から理解できると思われる。^{〔注6〕}

次に『因縁事』についてだが、この作品の聞き手は老芸妓「お鳥」の酒客と考えられる。そして語りの目的については、作中に「わたしの父親の昔の話は、そら仲々面白おまつけど、〈中略〉又の時にお話しましょ」という語りが挿入されている点をも考慮すると、自らの客の慰みとなるような珍しい物語を自身の半生記として提供するものであることが想定できるであろう。更にその背景には、「機多とか、新平民とか言ふ言葉を、斯うして平気で自分の口から言へるや

うになりましたんは、やうやうこの二三年のこと」という物語世界内の時間的な問題も介在していると考えられる。

ここでは、物語世界内語り手「お鳥」が「私語り」によって構築しようとする自己像を分析するにあたって、『因縁事』の先行作品であり、内容上の顕著な類似が認められる、宇野の『少女小説』『国境の峠に瀝ぐ涙の雨』（大正4・8『少女の友』）以下、『国境の峠に…』と略記―との比較が手がかりとし、『因縁事』において改変・加筆された箇所のうち、語り手が「私語り」によって構築していく自己像の傾向を端的に表示する部分に注目していく。^{〔注7〕}

このようにして『国境の峠に…』と比較した時に第一に注目したのは、ナラティブの変化である。例として冒頭の文章を比較すると、先行する『国境の峠に…』の場合は、

おときは機多の娘であつた。河内の國の某といふ、小さな機多村でおときは生れて、そして育つて来た。

というものであり、いわゆる三人称客観的な、『異質物語世界』の語りである。^{〔注8〕}

それに対して『因縁事』の場合は、

わたしの生れた在所だつたか？ 生れた在所の名前だつたか？

その名前だけは堪忍しとくなはれ、いゝえ、わたしはもう別にかまふことはおまへんけど、又誰に差触りがあるや知れまへん、（と斯う言ふのは、哀れな老女のお鳥が物語りである、）

となっており、そこから「私語り」（＝「等質物語世界」の語り）が展開されることが示されていることがわかる。右の変化（転換）によって、一人称の話者による物語内容との交渉やそれへの評価の位

相などが、新たな表現の領域として不可避免的に紙上へ用意され、そのような点に、前に述べたような「私語り」に伴う諸側面が特に顕在化するといえるのである。

さて、その後の両作品に共通する主たる物語内容は、主人公(『国境の峠に…』においては「おとき」あるいは語られる「私」の成長と、その過程における「在所の村」の外にある高等小学校への進学をめぐる父娘の葛藤、及び高等小学校における差別体験だといえる。その上で注目されるのが、『因縁事』において明確に加筆されている要素、つまり作品中盤における、「兄」に関する挿話の登場と、それが果たす機能である。この「兄」は、両親や村の人間から「極道もん」と評される人物として語られるが、「私」の高等小学校時代における、家の火事騒ぎの際の出来事として、学校の運動場の近くの「鎮守の森」で、二週間ほど家出をしていた兄と再会する場面があり、そこで「兄」が幼き「お鳥」に、「お鳥、俺はもう一生こんな村へ戻らんつもりやが、われもこんな村を早う逃げ出して、町の大勢人のゐる中へ混つてしまへ、こんなとこにゐたら、一生頭が上れへんぞ、な、それだけ俺が言うといたるわ」と語り聞かせるのである。その「兄」の言葉は、「私」の幼少期からの「大阪」へのあこがれに、「村」からの脱出という要素を新たに付け加え、増幅させることになる。「私」が十六才の春に目にした「草摘み」の光景に触発された感慨として記される「その日から、その日からだす、わたしは、どうぞして大阪へ行きたい、又どうぞして屹度行かう言ふ心が、はつきり定まりました、(中略)子供心に、村のはづれから、西の方、大阪の天王寺の塔を見るにつけ、そこに寝ころんだやうに見える、化物見たい

な大きな町、あそこへ行ききへしたら、極道もんの兄の言葉やないが、あの化物の中に混つてさへしまうたら、屹度何ぞえゝことがあるに違ひない、と思ひ詰めたんに違ひおまへん」という一節に注目すると、「私」の都会へのあこがれが、「村」からの脱出を主目的とするものとして語り直されるに至ることが確認できるのである。なおこの部分は、『国境の峠に…』にも対応を見出し得るものだが、ここでは「この頃からどうかして是非大阪へ行きたい、又屹度行かうといふ心が、おときの言葉にも行ひにも明らかに現れる様になつた」と、漠然とした都会への憧れが地の文において語られるのみである。その後の両作品に共通する物語内容は、大阪への奉公の申し入れと、その受諾に伴う親子の葛藤や別れ、そして奉公先で出会つた男と結婚の約束を果たし、男の家へ嫁ぐ旅に出る、というものである。そこで検討したいのが、作品結尾における話者の付言(付加部分)なのである。『国境の峠に…』の場合は、「私」の結婚相手である筈だった「大和の金持」とともに、互いの出自が「機多」であることを告白しあつた後、「斯う云つておときは、(中略)いつ止む時もない様に、さめぐと泣きつづけた。それを聞きつゝ、かの大和の金持の息子も、慰める言葉なく、亦さめぐと泣きつづけた」と、ただ二人泣き合うことの描写で作品が閉じられる。それに対して『因縁事』では、同様の内容の描写や会話の後に、更に次のような話者の言及が続けられるのである。

……そして、わたしは、どうだす？　そこでその旦那はんと別れてしまひましたんだつせ、そのまゝだす、そして、わたしは父親とも母親とも別れたまゝだす、さあ、又一つ氣直しに、

唄でもうたひまよか？

即ち、『因縁事』においては、出自の告白の後に、「金持の機多の息子」の家にも嫁がず、また在所の「機多」の村にも戻らずに、恐らくは都会において芸娼妓としてその後の年月を送り通し、現在に至った旨が語り足されていることがわかる。この付言は、特に、話者による物語世界との交渉の位相を明瞭に示した部分であり、付言に示されたような（その後の）半生を辿るに至る道程として、そこまでの物語内容を意味づけているものとして理解できるのでないか。そしてそこにおいて、特に「兄」の挿話の機能において顕著に認められる、「私」における「機多」の共同体からの離脱への指向が、語る「私」と語られる「私」において一貫する要素―執着として構築されているのである。

ところが『因縁事』についても、そのような「私語り」の基調とは相反するような要素が作中に散見される。まず注目されるのは、右に「兄」の挿話が果たす機能について引用した部分の結尾に「後になつてわたしにも（村からの脱出をすすめた「兄」の心情が―論者注）分りました」という記述がみられ、更に「（大阪へ行きさへしたらよいことがあると―論者注）思ひ詰めたんに違ひおまへん」のような、直前までの記述を、物語内容の「現在」時において「過去」の「私」が抱いた感懐ではなく、その感懐に、語る「現在」の話者による介入がなされている可能性を敢えて顕在化させる処置が認められる点である。そしてこの箇所が、前に確認した通り、「お鳥」の「私語り」を貫徹させるために重要な機能を果たしている点に鑑みると、如上の処置は、語り手における事後的な自己像の構築の手つ

きを露呈させる痕跡として理解できるのではなからうか。そして、それに加えて注目されるのは、作中に、〈現在〉の話者の言葉として「わたし等の筋のもん」の如き表現が頻出する点である。こうした表現は、「機多」の共同体からの離脱への執着というあるべき自己像とは明らかに相反するものであり、同時に、「機多」への逆説的な執着を裏付ける事態ともいえる。

そして以上のように、ある一貫した話者の像を構築しようとする作品基調と、それに相反する要素との共存が、語り手の「行為遂行性」を露呈する痕跡として機能しており、「お鳥」の語りの聞き手である酒客が、そのような様態を残しつつ採録したものととして、『因縁事』は理解できる。即ち、『因縁事』及び『長い恋仲』における物語世界内の聞き手はそのような機能――採録者であり、かつ、語りの目的を顕在化させる――をもつものとしてまとめられるだろう。なお、主人公あるいは語り手の出自を「機多」と規定する語りが、「異質物語世界」の語りである『国境の峠に…』とは異なり、『因縁事』では一人称の話者の自己定義である問題との関わりについては「Ⅳ」で更に言及したい。

これに対して『蔵の中』は、語り手がへりくだりながら、頻繁に呼びかけを行うものの、聞き手の像は不明である。また作中には、自らの語りを「女がよくやる」「愚痴話」を、男の面を被った女のような私がするだけの事」とする自己言及がある程度であり、語りの目的についても不明だといえる。

このような点から、『蔵の中』は、前に検討した二作品とはやや性

格の異なる「私語り」だといえようが、そこで注目されるのが、作品後半、質屋の蔵の中で見出した自らの着物に触発され、語り手が往事の思い出を語り出すに至って、次第に、ある一貫性をもった「私の過去」が確固なものとされていく点なのである。

まず重要なのは、「越後上布の緋の帷子」や「濃鼠の立廻の薄羽織」に触発され、「三十歳の頃」に出会った女の思い出を語り出す場面である。この一節において、その女が「人の妾」であったことが明かされるとともに「今にお話するうちに分りますが、私は子供の時分から妙な階級の女ばかりと、不思議に数多く知り合になります」という語りが提示される。そこにおいて、そこまでの物語言説において既に語られている、「私が「友禅」の蒲団を質入れする要因となった「妾」との交渉に加えて、それ以前にもあった「妾」との交渉という「過去」が用意され、更には、それよりも「過去」へさかのぼる「妙な階級の女」との交渉の存在が予告されているのである。

しかし、それとともに「古い中学生時分から」の着物に触発され、中学時代における「娘義太夫」への恋慕を語り出す件が見逃せない。ここでは、「やつぱりその時分の事でした、私は金に困った結果、中略質屋といふものを考へ出しました。質屋といふものと、後年こんなに仲よくなつた私が、それに就いて考へたこれが最初です。」中略これが、大体、先づ恋らしい恋の最初の私の苦勞です」と記され、ここにおいて、女についての「苦勞」と並行するものとして、語り手の質屋通いの端緒が示される。更に続けては、

そしてその次に恋ひと名の付く様なものをしたのは、幼な馴染の芸者とです。それから、それから、等、等、等、等、だが、

私は私の恋愛史を話すつもりなのではありません。申し上げたいのは、私が、如何に変な階級の女とばかりのいきさつで、この四十年を送ったかといふ事の、一例を述べるのに過ぎないのです。「中略」そして今になって見ますと、数多のさういふ並でない女が駆足する様に通り返した後に、私の人生に残されたのはこれ等の着物ばかりだともいへるのです。

とも述べられることにより、中学時代にまでさかのぼる「変な階級の女」との交渉が語り出され、そのような傾向が「変な階級の女とばかりのいきさつで、この四十年を送った」とまで、やや誇張的に拡大されるにまで至るのである。

ところで、この「変な階級の女」が、いわば語り手以外の他人の所有にかかる女であることに注目し、その点から、「私の質屋通いとも相関的な『借り物』への指向を見出されたのは上野昂志氏である。氏は、そのような「私」の指向を、予め達成（全き所有）を妨げられた対象への欲望という点に見定め、それがこの作品における語りの原動力に他ならないと指摘された。^(注) 本論でも、右の指摘を基本的に踏襲するが、ただし本論では、そのような執着的な傾向を、前に述べた「地の文」と会話との文体的接近を伴う「私語り」がもつ性格と、更には「行為遂行的」側面との関わりにおいて把握してみたい。果たして、本論の以上の検討をふまえる時、「私」における「借り物」(の女)への指向性を保証し、更にいやましにしていく要因が、右に検討したような、一貫性を保持した「私」の「過去」の増幅だといえるのではないか。また、「私」における「変な階級の女」とのつきあいと不可分なものとされる着物への執着や、質屋通いに

関しても、右にあげた引用部分でその端緒が語られることにより、作品冒頭に記されている「私は下宿屋から支払を滞らして追出されさうになつても、質屋の利息だけは、暴君に年貢を取める様に、毎月三日までには必ず収める事を怠つた事ありません。《中略》着物といふと、たとひそれが不幸にして自分の手元に置いておけなくても、その所有権だけはどうしても手放せないのです。だから時々考へると馬鹿らしくなる事もありますが、書生時代の、(もう十五年も二十年も前に入れたもので、)一円とか八十銭とかの紡績の着物や羽織まで、今だに利息を払つてゐる様な次第なのです。《中略》その十五年二十年の間、《中略》私が変らず離れないのはそれ等の着物ごととそれを入れてある質屋とだけです」という一節との呼応が確認できる。そしてここから見出される、単なる着物への執着などではない、着物の利息を払い続けること自体が目的と化しているような話者の偏執的な傾向に、いわば《過去》が付け加えられることになる。と理解できるであろう。そして、そのような《過去》の付加は、「私」における「借り物」への執着を保証する効果をもたらし、またそのような執着は、『蔵の中』におけるその他の主要モチーフである蒲団や下宿の「借り物」性に関しても波及的に、それへの執着を保証していくことになるのではなからうか。

だが、そのように《過去》を増幅させてゆくことから、「私」の「借り物」への執着という像を構築していく方向性を、『蔵の中』から見出した時に、次のような件りは、それに背反する要素として見出されてくるだろう。例えば、作品冒頭に記される「私」が自らの《現在》まで続く習慣を語る次のような一節である。

毎年、夏から秋に、秋から冬に、又冬から春にと新しい着物の季節が来る毎に、折角あるのですから質屋にあるものを出せばいいのですが、古いものを金を出して取つて来るより、同じ事なら別のが欲しくなつて、ひどい工面をして又新しいものを買ふことです。

これは、「借り物」へ執着する一方で、新しい着物を常に新調しようとする「私」の指向の明言である。更には蒲団についても、「友禪」の蒲団を新調し、その後では「これ迄の蒲団は、残しておく」と《中略》新しいのを用ふのが惜しくなると思ひましたので、思ひ切つて屑屋に売却つてしまひました」のように記す如き傾向が確認できる。そのような、「借り物」への執着とは背反する所有の欲望というべき「私」における指向の齟齬、あるいは二重性の存在は、「私」における「借り物」への執着が、下宿の騒音からの逃避やその他の要因から思いついた、質草となつてゐる着物等の虫干しの企てへと至るプロセスなどを語るうちに、それに触発されつつ、それまでの物語言説において語られた「私」の行動に一貫した根拠を与えるように語り出され構築されていった像であることを明らかにするものである。そのような意味において『蔵の中』における話者にも(作品後半にかけての会話文の登場ともあわせて顕著に認められ出すという部分性を伴いつつも)「私語り」に伴う「行為遂行性」を見出すことができるであろう。そして、そのような機構の結果生み出されたものとして、『蔵の中』の話者における「借り物」への指向は、如上の二重性の一部をなすものとして評価できると思われる。

ここで以上の検討を総合すると、三作ともにその「私語り」の構

築プロセスにおいて語り手のなにかへの執着を語り出すことによつて、〈過去〉から〈現在〉に至る、ある一貫した話者の人物像を提示しようとする点で共通する。ただしそこには、そのような一貫した人物像とは矛盾する要素までもが共存させられており、その結果、非教養小説的に変質しない「私」を提示しようとする「私語り」が、その語りにも矛盾する要素を塗り込めようとする「行為遂行的」な営みであることまでが紙上に露呈されているのである。そして、そのような各作品の内容面に関わる傾向は、特に「私語り」の「行為遂行性」の顕在化の抑制という点に関して、「地の文」と会話との間における文体的落差の小ささ―それは、等質物語世界の内における「私」やその周囲の人物と、話者が等質（均質的）な言葉で語ろうとする結果として理解できる―を利用することによつて、よく保証されるものであるだろう。如上の字野作品における話者の「行為遂行性」は、以上のように隠蔽とその露呈という二面性を共存させた様態において、紙上に顕在化されているのである。

—この稿、つづく—

《注》

（注1）本論でいう「辞」とは、時枝誠記が『国語学原論』（昭和16・

12、岩波書店）以下で提示した概念に由来するものである。

時枝は、話し手の「主体的表現」が提示される「接続詞・感動詞・助動詞・助詞」等を「辞」としているが、本論ではその中でも特に文末に用いられる助詞・助動詞的な語彙、その

中でも特に「ムード」的な要素を中心化したものとしてこの用語を採用する。なお、本論でいう「詞」についても、話し手の「客体的表現」が提示されるという、時枝の概念に基本的に拠るものである。

（注2）

話者の属性や聞き手への顧慮を示す待遇表現を排除し、「た」止めの文末を採用することから、日本の近代小説における語り手の「中性化」が果たされたことについては、柄谷行人氏の指摘がある。「日本近代文学の起源」再考Ⅱ（『批評空間』Ⅱ-2号、平成3・7）参照。なお、本論では、氏のいう「中性化」を、本論が検討するような、地の語り与会話文の双方に向けられる話者の介入・権力性を隠蔽する機能を担う概念として発展的に継承、かつ転用するものとして、「中立化」、及び「中立性」「中立的」という用語を採用する。

（注3）

G・ジュネット著『物語のデイスクール』（書肆風の薔薇、昭和60・8）及び、『物語の詩学』（書肆風の薔薇、昭和60・12）参照。「等質物語世界」とは、話者が作中人物の一人として物語世界に登場する語りのことであり、注8にあげる「異質物語世界」とは、話者が作中人物として物語に登場しない語りのことをさす。

（注4）

鈴木登美「字野浩二の小説と私語り」（佐伯彰一編『自伝文学の世界』朝日出版社、昭和58・11）は、はやくこのような問題に注目した論考だが、特に注5に述べるような点をめぐって、本論とは立場を異にしている。

（注5）

J・L・オーステインによつて提唱された「行為遂行的言説」

とは、必ずしも事実に対応するのではなく、現在及び未来の事柄についてこれから話者がなすことを提示するものとして定義されている。本論では、そのような原義を参照しつつ、鉤括弧つきで、「行為遂行的」「行為遂行性」という表現の幅をもたせながら、話者の語りが物語内容に対する齟齬や矛盾を顕在化するという事態を記述するための概念として、変型・転用を行うのである。

(注6) 例えば、中村星湖『少年行』や中勘助『銀の匙』、更には昭和期の作例として、太宰治『思ひ出』などの文体を参照されたい。

(注7) そのような改変・加筆部分は、河内銀二郎『特殊部落情話 涙の物語』(大正8・7『改造』、及びS・H生(平野小剣)『呪はれた女の運命』(大正11・1『水平』)等の、『因縁事』との顕著な類似話型作品群には認め難い要素でもある。なお本論では、宇野作品に頻出する「穢多」という語を、作品からの引用語句として括弧付きで用いる。また、宇野における、いわゆる「被差別民」認識については、差別への批判・批評性の欠如に関する渡邊巳三郎氏の指摘がある。「絶望の逃亡―宇野浩二『屋根裏の恋人』・『因縁事』―」(『法政大学大学院紀要』一三号、昭和59・10)参照。本論の立場は、基本的に渡邊氏の指摘を肯いつつ、あくまで宇野作品における「行為遂行的」な語りの傾向を論証しようとするものである。

(注8) ジュネット前掲書参照。

(注9) 上野昂志『貸す／借りるのダイナミクス』(『早稲田文学』一

一一号、昭和60・8)参照。

【付記】

本論では、作品本文の引用については初出形を用い、旧字を適宜新字に改め、ルビ・傍点等についても適宜省略した。なお、『美女』における「地の文」の文末処理傾向については、初出形とほぼ同様の本文であり、句点による文の区切れが二〇〇箇所以上認められるようになる『新選宇野浩二集』(改造社、昭和3・8)以降においても、初出形の本文から見出された傾向と顕著な違いは認められないことを補足しておきたい。

(みやざき やすし・日本学術振興会特別研究員)